

# ジャガイモの世界史

歴史を動かした「貧者のパン」

伊藤章治著

何処の家庭の野菜かごにも1つや2つ入っているジャガイモについてこのように多くの歴史があったことに驚かされました。

## ；ジャガイモの故郷

ペルーとボリビアにまたがるアンデス山脈のほぼ中央部、標高3812mに位置するティティカカ湖のほとりの高原地帯がジャガイモ発祥の地とされています。

15世紀～16世紀初めに栄えたインカ帝国は5000キロメートルの地域を版図とする大帝国です。この大国を支えてきたのがジャガイモだといわれています。そのインカ帝国が16世紀初めスペインに無残に征服され、事実上滅亡しました。その後、黄金と共にスペインに持ち帰られたジャガイモが戦乱や飢饉など歴史の曲がり角でしばしば、ヨーロッパの民を救うこととなるのです。

## ；ヨーロッパにおけるジャガイモ

1600年になると、ジャガイモは、スペイン、イタリア、オーストリア、ベルギー、オランダ、フランス、スイス、イングランド、ドイツ、ポルトガル、アイルランドにも入国を果たしたが植物学者や研究者だけが栽培していたにすぎない。

ジャガイモは悪魔のいも、疫病に罹るなど一般民衆には食することに抵抗や偏見がもたれていました。(p95)

富国論のアダム・スミスは「同じ面積の耕地で、ジャガイモは小麦の三倍の生産量がある」とジャガイモを高く評価しています。

フリードリッヒ大王をはじめとし多くの為政者があの手この手を使い民衆にジャガイモの栽培を奨励するが多くは民衆の抵抗が多かったようです。

1618年～48年のドイツの宗教対立に諸外国の参戦による三十年戦争でドイツの農民は耕地を失い、もはや迷信にこだわっていられなくなり、じゃがいもの耕作がはじまりました。さらに大王はプロイセン全土に1756年「ジャガイモ令」を発するのです。その結果プロイセン軍隊は屈強、精強となりました。強国への道の出発点はジャガイモにあったということです。

フランスにおいてはアントワーン・パルマンティエ（1737～1813年）に負うところが大きいのです。パルマンティエはプロイセンの捕虜となったことでジャガイモにめざめるのです。その頃フランスは諸事情により国家財政は窮乏し民衆の不満は募っていき、その危機脱出のための論文募集に応募したパルマンティエの論文が採用され、奇策も用いられ「ジャガイモも悪くない」という評判が広まっていったのです。

### ；ロシアにおけるジャガイモ

ロシアにおいては一七世紀末、ピョートル大帝はじゃがいもに感動し凶作、穀物不足が続くロシアで「強兵」をつくるにはジャガイモが不可欠であると考えました、その後も元老院令を發布したが容易にじゃがいもは普及しなかったようです。1842年ジャガイモの作付け強制に反対する一揆がおこります。しかし弾圧されます。しかし翌1843年政府は「説得による普及」に切り替えこれが功を奏し、1913年には大きく作付け面積が増大します。その後、ロシアにおける二度にわたる世界大戦、社会主義国家の成立と破綻などの都度、ロシア国民を支えたのがジャガイモであったと思われます。ロシアにおいてシベリアにジャガイモが定着した背景には、デカプリストたちの蜂起とその後鎮圧されシベリアに流刑となった青年将校たちの働きがありました。

### ；その後のヨーロッパ

一八世紀のヨーロッパの食糧危機、産業革命による市民の困窮を救ったのはジャガイモ（貧者のパンと云われ）であったようで、次第にジャガイモが普及していきます。ナポレオンもまた軍事的見地からジャガイモを奨励し、この時代フランスのジャガイモ生産量は急カーブで上昇しています。第2次世界大戦末と戦後にかけてドイツのティアガルテンと云う獣園がすべてジャガイモ畑となり市民の生活を支えたと言うことです。今も、1832年にはじまったクラインガルテンとよばれる市民農園でもジャガイモが植えられ色々な変遷を経て2007年には46600ヘクタールになり、ジャガイモは「食糧危機」に対しても「食の安全装置」でもあるといわれています。

### ；アイルランドとジャガイモ

アイルランドとジャガイモは切っても切れない縁があったようです。十二世紀初めのアイルランド国内では、王達の権力争いに乗じ英国王ヘンリー二世の英国軍がアイルランドに侵入したのを皮切りに八百年近い英国との抗争がはじまります。1641年「カトリック一揆」が起こりますが、宗教改革をなしとげたオリヴァー・クロムウェルによりカトリック教徒であるアイルランド人が大量虐殺されその農地を追われ岩盤と石ころだらけの西部へと追いやられたのです。農民は農地の2/3で小麦を作りそのほぼ全てを英国人地主に収め、残りの1/3にジャガイモを植えて食料としていました。「貧者のパン」の役割を果たしていました。しかし1845年「ジャガイモ疫病」が猛威を振るいアイルランド国民を地獄さながらの生活に追い込んだのでした。それにより働き手はこぞって米国等海外に移民となりました。

この様な米国移民から後のジョン・F・ケネディーが誕生するのです。

アメリカにおいてはジャガイモに関して抵抗感はなかったようです。

## ；日本におけるジャガイモ

日本には1600年頃オランダ船によって長崎にもたらされたと云われています。天保の大飢饉ではこのジャガイモにより餓死を免れたとして「御助薯」と呼ばれていました。明治30年代には、長崎から輸出されていました。日本の最大産地は北海道ですが、長崎では同じ品種を2度作る事が出来ます。長野でも「ニドイモ」と呼ばれ栽培されていました。この本で紹介された足尾銅山の公害により北海道に移住を余儀なくされた人々の苦悩と、この人々がジャガイモに救われたことが書かれています。

戦後シベリアに抑留された日本人もまたジャガイモに救われたことがあるといっています。しかし、1934年の東北の飢饉ではジャガイモの力は発揮されることはなく、多くの悲劇を生んでいます。

その原因はジャガイモには病気に対する弱さ、種芋の抱える問題があります

その飢饉が満州へと農民を移民させ、敗戦とともに那須に種イモの生産へとむかわせたのです。

今、日本では、男爵、メークイン、きたあかりなどが一般的ですが北海道の函館の郊外の七飯村に高知生まれの川田小一郎（色々な功績を認められ男爵の爵位を受けている）の男爵の称号を引き継いだ息子龍吉が英、米に種イモ「アイリッシュ・コプレー」を注文し、この種イモが土地に合い、見事に実りました。龍吉にちなみ「男爵いも」とよばれるようになったのです。

今後、地球規模で食糧難の時代が来ると予想されますが、ジャガイモが再びお助け芋になる事があるかもしれません。でも歴史を見るとお助け芋が必要な時代は異常な時代であったのです。

世界の情勢をみるに環境要因、水問題、人口増などから近い将来が心配されています。特に日本の穀物自給率の低さが気になります。

私はこの本によって、ジャガイモはドイツと思っていたが一番の消費国はベラルーシであること（p149）や、原原種と種芋に関する厳重な管理（p159）など初めて知ることとなりました。思いがけずその時代まで悲惨な状況にあった女工たちの環境改善に努めた、大原孫三郎などの名前が出てきました。ごく当たり前で食べているジャガイモにいろいろな歴史があることは興味深いことでした。